

葛西善蔵(かさい・ぜんぞう)☆常設展示作家

1、葛西善蔵の生涯

<生涯1 幼年・青年初期一流浪の夢> 0歳～17歳 1887～1904

葛西善蔵は明治 20(1887)年1月 16 日、青森県中津軽郡弘前(現・弘前市)松森町に生まれた。父宇一郎と母ひさの長男であり、いそ、ちよの二人の姉がいた。父宇一郎は米の仲買業を営んでいたが、家業不振に陥り、明治 22 年に家宅を手放し北海道へ移住。なお同年に、弟の勇蔵が生まれている。

その後、一家は青森町を経て五所川原村に移住。善蔵はここで小学校に上がるが数ヶ月で再び転住、母の郷里の碓ヶ関村で少年時代を過ごす。碓ヶ関尋常小学校補修科では恩師・石田政蔵に出会い、「苦境突破の気魄養成」(小山内時雄「葛西善蔵の少年時代」)を図る教育方針に触れ、大きな感化を受けた。卒業後、五所川原の親戚・神重三郎が営む質屋で手伝いをするかたわら土蔵にあった『里見八犬伝』を愛読、この経験が後に文学を志す素因となる。

そして青森市米町の便利屋で丁稚奉公を経験した後、明治 35 年に初上京。新聞売りをしながら夜学に通うが、母の死により帰郷、翌年には北海道に渡り鉄道の車掌や枕木採伐などの職を転々とした。この間の足取りは明らかではないが、小説「悪魔」や「雪をんな」の記述は、若き日の善蔵が青年の夢を抱き、忍路(おしよろ)や歌志内(うたしない)を流浪したことを窺わせる。その透徹した雪の描写は冴え、彷徨の悲哀を美しく漂わせている。

<生涯2 無名時代一文芸に捧げる犠牲> 18歳～24歳 1905～1911

明治 38 年再上京、哲学館大学(現・東洋大学)大学部第二科普通講習科に入学するも、翌 39 年3月無届欠席により除名となる。この頃、佐藤栄七(塗山)・八田健一(八絃)という友を得る。また、大町桂月の美文に親しみ、柳浪・紅葉・独歩を愛読した。40 年夏、鎌倉建長寺前の龍王館に2ヶ月程滞在し、「商人宿」という作品を書き上げるが自ら破棄。41 年3月に南津軽郡浪岡村の地主、平野弥亮の長女つる(明治 22-昭和 43)と結婚。翌月単身上京し、栄七の紹介で徳田秋声に師事する。また、秋声の紹介で「早稲田文学」の編集者であった相馬御風を知り、御風宅に寄寓していた光用穆(みつもちきよし)と知り合った。一時碓ヶ関に帰

り葡萄園の中の小屋で妻と暮らすが、9月に再上京、坪内逍遙の講義に憧れて早稲田大学英文科の聴講生となる。

明治 42 年5月から 10 月まで、茨城県大洗の小林楼に滞在。妻の実家で長男亮三が誕生するも帰郷せず、「命がけで自分を主張し実行」する志を持って創作に打ち込む。結果的に「かきかけのもの七八十枚は」「引割いて反古にし」、作は成らなかったが、「文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたい」という不退転の決意を抱くに到った。(光用穆宛書簡)この後、鎌倉で下宿住まいし、読書・沈思する日が続く。43 年 11 月、平野弥亮に伴われ妻と長男が上京、岳父の援助で東大久保に初めて一家を構えた。翌 44 年夏、妻は帰郷し長女きく江を出産、善蔵はひとり東京で暮らすが、この間の生活が処女作「哀しき父」の構想の源となった。

＜生涯3 「奇蹟」時代－初期・文学の場＞ 25 歳～29 歳 1912～1916

明治 44 年、終生の付き合いとなる舟木重雄や広津和郎、相馬泰三など多くの友を得、翌 45 年1月に同人雑誌創刊の話が持ち上がる。そして8ヶ月後の大正元年9月に「奇蹟」は創刊されるが、この誌名は、同人たちが井の頭公園を散歩した際、それまで無口な印象だった善蔵が突然踊り始め、驚いた舟木が「奇蹟だ」と叫んだことに基づく。創刊号で善蔵は処女作「哀しき父」を発表し、この1作に限って葛西歌棄(うたすつ)の筆名を用いた。幼年期を過ごした北海道寿都郡に存在する漁村の名前を筆名としたことの真意は不明であり、諸説が唱えられている。「奇蹟」は大正2年5月の9号で廃刊となったが、同人間の交流は依然持続し、時には互いをモデルに作品を描き、その後も琢磨し合う関係が続いた。

大正3年1月に「雪をんな」(大正6年7月「処女文壇」発表)を書き上げたのちは、他作家の下請けで翻訳小説の梗概をまとめる仕事が目立ち、しばらく創作は影をひそめる。小山内時雄は「雪をんな」脱稿までを善蔵の作家活動の初期とみなし、「肉親の犠牲の上に自己の文学を築こうとする苦悶を冷静に客観的に描いた時期と位置づけている(講談社『日本近代文学大事典』)

それまで数年間、本郷区や麴町区で下宿暮らしを続けてきた善蔵であるが、大正4年4月、南津軽郡蔵館村(現・大鰐町)唐牛に家を借り、妻子と共に住む。翌5年9月には一家をあげて再上京、牛込区天神町での新生活が始まる。

＜生涯4 新進作家時代－中期・放浪の燃焼＞ 30 歳～35 歳 1917～1922

大正5年秋、この頃善蔵は米穀仲買店に一時勤務した。善蔵が生活に困っていることを聞いた店主の招きによるものだったが、「毎日出勤しても何の用事もなく」、やがて「やめてしまった」(谷崎精二『放浪の作家』)。翌6年2月、「早稲田文学」に「贗物さげて」(のちに「贗物」と改題)を発表し、この作で初めて原稿料を得るが生活苦は続き、8月には妻つるが金策のため帰郷。妻の戻らぬ間に借家から追い立てられ、この経験が出世作「子をつれて」執筆に結びつく。

大正7年2月、家計困難により妻子を妻の実家に預けるが、翌月発表した「子をつれて」で注目を浴びる。この時期、牛込区の下宿信濃館に移り、谷崎精二と頻りに往来し親交を結ぶ。9月、碓ヶ関に帰り父の家で家族と暮らす。翌年単身上京。3月、第一創作集『子をつれて』(新潮社)が刊行され、出版記念会には徳田秋声や中村武羅夫、「奇蹟」同人だった面々が出席、新進作家としての地位を確立した。

大正8年5月から信州・別所温泉に長期滞在、その体験に基づいた作品「不能者」や「風聞」はモデル問題を招き、文壇を賑わした。この年の暮れから、鎌倉建長寺内の宝珠院に一室を借り居住、翌年には郷里から長男を呼び寄せる。食事は坂の下の茶屋・招寿軒から取り寄せ、のちに「おせい」の名で作品に描かれる茶屋の娘、浅見ハナが運び役を務めた。

大正10年、度重なる遁走と小説が書けない事情・心境自体を題材として「浮浪」や「仲間」といった作品を発表。11月には父宇一郎が上京、弟の勇蔵宅に身を寄せた。翌11年2月の「朝詣り」あたりから「自他への苛烈味は薄らぎ」、「後期へ移る気配を見せ」と小山内時雄は指摘しているが(講談社『日本近代文学大事典』)、この年は「父の出郷」や「不良児」など肉親に対する情愛や温かみを漂わせた作品が目立った。

＜生涯5 私小説の神様－後期・風格と詩情＞ 36歳～41歳 1923～1928

大正11年7月に父宇一郎が死去、衝撃覚めやらぬ中、10月には肺浸潤の診断を受ける。翌12年春には喘息や神経痛に悩まされ、健康面で陰りが見え始める。同居していた長男は郷里の高等小学校に進学、鎌倉に残った善蔵はドイツ遊学を夢見るが、関東大震災(大正12年9月)に遭い挫折する。約4年過ごした宝珠院は倒壊し善蔵は東京へ移るが、翌月にはハナも後を追って上京、本郷の下宿・西城館で同居生活が始まる。家庭問題に対する懊悩と創作に集中出来ないことへの憤懣の中で、凄絶な作品として知られる「蠢く者」(大正13年4月)が生ま

れた。また同年6月の「椎の若葉」は、初夏の光を浴びて伸び行く窓外の樹木への憧れを綴った、詩情溢れる作品である。9月、世の喧噪から逃れ日光湯元温泉に上り、湯の湖湖畔の板屋旅館に2ヶ月間逗留。同地で書かれた「湖畔手記」は、郷里の妻への謝罪の念、愛人「おせい」に対する哀憫の情、不遇のまま世を去った親友Kへの哀悼の意が輻輳した破格の一作であり、「風格のある心境小説」（小山内時雄）として高く評価されている。

大正 14 年1月、湯元での体験に基づいた「血を吐く」を発表するが、神経痛治まらず次第に創作の筆は鈍る。3月、ハナが三女ゆう子を出産、翌月には世田谷の三宿（みしゆく）に家を借り、西城館から移り住んだ。7月、妻子に会うべく浪岡村を訪れたのち、石坂洋次郎らの世話を受け弘前の斎吉旅館に長期滞在、これが最後の帰郷となる。大正 15 年に入って、善蔵の酩酊しながらの漫談を活字化して掲載する雑誌は数を増し、談話筆記が活動の主要な位置を占めることになる。夏には、晩年の作では最長のものとなる「酔狂者の独白」を口述、「不同調」記者だった嘉村礒多が筆記を担当した。この作品は完成までに2ヶ月を要し、改元間もない昭和2年1月に発表された。同年4月、最後の小説となる「忌明」を発表、翌月には呼吸器を患い一時入院。10月、胸部疾患の進行により再び入院となるが、その直後に弟の勇蔵が急逝。49日を機に善蔵は三宿に帰り、以後は病院に戻らず自宅で過ごした。

病勢が進む中、昭和3年4月に四女久美子が誕生。6月には同人誌「文芸王国」（佐々木千之主宰）の創刊に顧問として携わるが、創作を発表することは叶わず「お詫び」の文を寄せるにとどまった。7月18日、改造社版『葛西善蔵全集』第1巻の刊行を見届け、22日の晩には肉親知友らと別れの盃を交わした。翌23日昼頃から眠りに落ち、時折「一時ごろの汽車に乗っていく」、「切符を落とさないように」と譫言（うわごと）を発したという。夕方から意識不明となり、午後11時8分に息を引き取った。「雨後、風のない静かな晩であつた」と佐々木千之の「葛西善蔵氏臨終記」は伝えている。

2、葛西善蔵の代表作

○「哀しき父」

善蔵は、明治 40 年鎌倉で「商人宿」を書くが発表にいたらず、同 42 年茨城県大洗でも、書きかけの作品を破棄している。

大正元(1912)年9月、舟木重雄を中心に刊行された早稲田系の同人雑誌「奇蹟」創刊号に、葛西歌棄の筆名で短編小説「哀しき父」を発表した。実に、善蔵 25 歳の処女作となった。歌棄(うたすつ)は、江差追分に唄われる北海道寿都(すつつ)町歌棄の地名で、幼少年時代の北海道流浪による。これ以降は実名を使用する。

場末の病人だらけの下宿屋で、貧しく孤独な生活をする詩人は、自分をく(哀しき父)と呼ぶ。一家の哀しい離散のため郷里に帰した子を思うと、楽しかった日の象徴たる金魚を、街で見るに堪えがたかった。梅雨の朝、彼は喀血して倒れるが、金魚を見ながら「彼は静かに詩作を続けやうとしている」という一文で小説は終わる。

善蔵の生涯にわたる小説のテーマが、詩情豊かに出ており、「奇蹟」全 9 冊中でも傑出した作品といわれる。

○「子をつれて」

「哀しき父」「悪魔」「池の女」「メケ鳥」以来発表作の無い数年間は、例によって善蔵の帰郷・上京・一家集散がくりかえされたが、読書・勉強も深めていた。大正 6 年の「贖物」「奇病患者」「姉」「雪をんな」「発作」につぐ「子をつれて」が出世作となり、文名を挙げた。善蔵 31 歳である。大正 7 年 3 月 1 日発行の雑誌「早稲田文学」第 148 号に発表された短編小説。

貧乏な小説家小田は、家賃滞納で家主から立ち退きを迫られていた。金策のため郷里にやった妻からは、音沙汰がない。知り合いの警部を当てにするが、要求通りするよう諭される始末。小学生の長男と 7 歳の女の子をつれて家を出た。バーで晩飯を食べ、子供等を巻き添えにする恐れを感じつつ、夜の街をさまようのであった。

芸術に生きることと一家を支えて暮らすことの二律背反、子らへの愛情等が、善蔵の特徴である飄逸・ユーモアで包まれて描かれ、暗い題材に詩情が底流している。

○「おせい」

「おせい」は、大正 11 年 12 月に成立、同 12 年 1 月 1 日発行の雑誌「改造」に発表された。大正 8 年末、善蔵は鎌倉の建長寺内の宝珠院の一室に住んだ。近くの茶屋の娘、浅見ハナが、寺の高い階段を昇り降りして、食事を運び晩酌の相手をし、善蔵の看病もした。おせいのモデルであるハナは、善蔵の二児を産んだ。

おせいは、善蔵の貧乏・病氣・癩癩・怒罵を浴びせられる。例によっておせいの家への借金もある。善蔵は、忠実なおせいの婚期を思い、郷里に連れ帰り、婿をとらせ仕事の世話をさせたいと想像し、おせいも、それを素直に受け止める。「おせい物」には、献身的な純情可憐なおせいと、善蔵と壮絶ないがみ合いをする野生的なおせいとが描かれ、この作品は、前者に属している。

善蔵は、文学的感興を得るまで自己をどん底に追いつめじっくり書いた。自虐的なまでの酒も放浪も貧乏も女も、完結しない熾烈な創作の伴侶だった。

「おせい物」は、初期作品「池の女」と共に善蔵の小説を彩った。

○「湖畔手記」

栃木県奥日光の湯元温泉板屋旅館に、善蔵は大正 13 年 9 月から 2 ヶ月滞在した。その間、「改造」の編集記者古木鉄太郎の居催促を受けて、短編小説「湖畔手記」を 10 月に書きあげた。同 13 年 11 月 1 日発行の雑誌「改造」第 6 巻第 11 号に掲載され、葛西善蔵が生来もつ詩人としての資質が発揮された傑作である。

金策にも創作にもゆきづまった善蔵は、おせいとも喧嘩する。咯血した友人 K を見舞い、郷里の長男から詰責の葉書を受け取っていた。善蔵は、この停滞状況に堪えきれず、悲鳴をあげながら湯元温泉に遁走してきた。

「白根山雲の海原夕焼けて妻し思へば胸痛むなり」と郷里に子等を守る妻へ謝罪し、「秋ぐみの紅きを噛めば酸く渋くタネあるもかなしおせいもかなし」と、おせいとその腹の子も思い遣る。K が死に、自分も病気で原稿は捗らない。山水も樹も雲も無関心で、女中たちは健康すぎ、湖畔に生と死を思う善蔵を浄めていくのだった。

3、葛西善蔵のキーワード

<キーワード1 文芸の前に何物も犠牲にしたい>

心境小説の頂点に立つ善蔵の実生活は、作品そのままの破綻と放浪に象徴される。しかし、「幾つもの道が残っているうちは文芸をやらない」という創作姿勢は真摯であり、怠惰な酒びたりと放恣な日常ばかりだったのではない。

明治 41 年、新婚生活 1 ヶ月程で単身上京し、徳田秋声に師事する。明治 42 (1909) 年、22 歳の善蔵は創作を志し、茨城県大洗の小林楼に半年滞在した。その滞在費も岳父が無心されて援助した。この間、妻の実家で長男が誕生したが帰郷せず、岳父平野弥亮が命名している。

善蔵は未完成の作品も破棄して帰京し、友人の光用穆に「文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたい」と書き送る。即ち、文学への不転の決意をもたらし、以後の創作と生活を象徴する放浪だったといえる。

「生活の破産、人間の破産から僕の芸術生活が始まる」という善蔵の苛烈な生き方は、生涯文学を第一とし、妻子の犠牲・貧乏・病苦も、意に介さなかった。

<キーワード2 椎の若葉に光あれ>

善蔵没後の昭和 31 (1956) 年 7 月、青森県南津軽郡碓ヶ関村三笠山に建てられた葛西善蔵文学碑に、「椎の若葉に光あれ／親愛なる椎の若葉よ／君の光の幾部分かを僕に恵め」と、善蔵書簡からの集字文字で刻まれている。

碑文は、「改造」(大正 13 年、1924) 発表の「椎の若葉」からとられた。「椎の若葉」は、第二の妻おせいの家族との葛藤、善蔵の乱暴、妻への思い、自己の醜さを描く。狭い下宿部屋で、自分を振り返り、日を浴びて光る椎の若葉と一体化し、自己の文学的感興をつむぎ出して、読者に光の美しい拡散を見せてくれる。狭小な環境から、小説を生み出す善蔵の創作パターンである。

当時善蔵は、晩秋から冬にかけて病的気分に陥り、それを癒すべく酒の世界に耽溺していた。しっかりと幹をなしている樹木を見ては羨み、自分のような者は光を求める心が失われがちだと嘆息する。しかし、絶望的な祈りと光への希求は、善蔵文学の光芒を形作る要素となった。

<キーワード3 酒・貧病苦・放浪>

善蔵は愉快的酒飲みでもあり、かつ酔いしれクダをまき乱暴に及ぶなど友人にも恐れられた。しかし酒は、善蔵文学を産出したエネルギー源だった。祖父が死んだ時、幼い善蔵が酔って寝ていたエピソードがある。健康を害した晩年の善蔵は、

ちびちびと酒を飲んで口述し、あるいは狂気の様で筆記させた。時間をかけた口述筆記の作品は、構成正確・添削不要で、文学性も高かった。

善蔵は寡作だった。日に1～3枚がせいぜいで、明朝子供の食べる米が無くて、意に介さなかったり次作への気持ちが深まらなると執筆しなかった。小説が書けず、貧乏や病気、人間関係の不調和、借金等で身動きがとれなくなると、渦中の真っ只中から逃げ出した。その遁走は、また次の騒動や借金を作り出すのだが、珠玉の作品も生んだ。毎月4斗樽1本の酒を飲んだと言う善蔵は、幼時から父の没落によって北海道を初めとし、〈放浪の人生〉を運命づけられたともいえるだろう。

4、葛西善蔵のゆかりの場所

①若き善蔵の雪の彷徨

芦別市(北海道芦別市新城)

善蔵生誕百年記念に、芦別市新城に昭和 61 年「雪をんな」文学碑が建った。パンケ幌内川と歌志内からの雪の山越えを舞台に「雪をんな」と「雪をんな(二)」は、極北の雪と彷徨する魂を詩心豊かに描く。肉親への情味より創作を第一とした善蔵は、全てを閉じ込める深雪の孤高と峻烈な雪の修羅界を愛し、文学的生命を雪女に託した。

②作家的誕生の地

大洗海岸(茨城県東茨城郡大洗町)

明治 42 年5月6日、22 歳の善蔵は大洗海岸の小林楼に投宿し、同 10 月 10 日頃まで滞在、前年結婚した妻が男児を出産したが帰郷しなかった。未完成の作品も反故にし、「文芸の前には自分は勿論自分に附随した何物をも犠牲にしたい」と、文学に自己の生涯をかける不退転の決意を固めた土地、以後の苛烈な人生の象徴の地である。

③善蔵の創作エネルギー源—遁走

信州別所温泉・奥日光湯元温泉(長野県上田市・栃木県日光市)

大正8年、別所温泉の大島屋に滞在して、「馬糞石」や、モデル問題で物議を醸した異色作「不能者」「風聞」等の充実した作品を執筆した。

同 13 年、湯元温泉板屋旅館に2ヵ月ほど投宿し、傑作と名高い「湖畔手記」を得た。湯ノ湖畔に「秋ぐみ」の文学碑が建っている。

このように停滞の一切からの遁走と放浪は、常に善蔵の文学のエネルギー源だった。

④文学的発進の地

鎌倉山ノ内建長寺塔頭宝珠院(神奈川県鎌倉市山ノ内)

哲学館大学の縁で鎌倉は、独自の心境をもたらす。明治 40 年初の小説「商人宿」を建長寺前龍王館で書く。43 年松嶺院と釜谷米店前長屋で創作に努めた。大正8年から大震災まで建長寺内宝珠院に棲み「暗い部屋」等、油の乗った中期作品を書く。昭和 56 年、同塔頭回春院に墓碑が建立され、善蔵の菩提寺弘前市徳増寺から分骨された。

5、葛西善蔵の関連人物

☆徳田秋声(とくだ・しゅうせい):文学の師

善蔵は商家に生まれ、文学的環境に恵まれたわけではない。碓ヶ関尋常小学校訓導石田政蔵の感化が大きいという。12 歳の時、親戚の質店で『里見八犬伝』等を読み、文芸にひかれて、小説家を志した。

15 歳で初上京し、夜学に通う。のち北海道で働き、18 歳で再上京、哲学館大学に入学し、生涯の友佐藤栄七(号塗山)を知った。

明治 41(1908)年 21 歳、塗山の紹介で徳田秋声に師事した。当時は、自然主義文学運動が高まりつつあり、秋声は彼を相馬御風に紹介し、外国語の勉強を勧めたため、早稲田大学英文科で聴講した。善蔵は、特に秋声に作品を見てもらわなかったが、彼の時代に対する眼は拡大し、終生敬意を払った。秋声は、善蔵に対する弔辞の中で「独特の詩境」を讃えている。

☆「奇蹟」派の人々:文学の仲間

文壇は自然主義の時代を迎え、善蔵が師事した徳田秋声は、善蔵に「早稲田文学」の編集者相馬御風を紹介した。善蔵は御風と同県の光用穆を友に、光用を通して終生友情を結ぶ舟木重雄を知り、相馬泰三、舟木と早稲田大学文学部同級の広津和郎、谷崎精二等を知る。文学環境は拡大し、友情も誤解も同時に生まれ、作品化されていった。

大正元年9月、舟木、光用、相馬、広津ら早稲田大学文学部の学生や卒業生が中心となって同人雑誌「奇蹟」が発行された。善蔵が4作を発表した「奇蹟」は、大正2年5月、9号で廃刊となった。創刊号発表の善蔵の処女作「哀しき父」は、高い評価を受けた。善蔵の死に際しての友情は厚く、遺児養育資金も集められた。

☆浅見ハナ(あさみ・はな):第二の妻

大正8年12月下旬、善蔵は鎌倉山ノ内建長寺内の宝珠院の一室に住んだ。建長寺内半僧権現下の茶屋[招寿軒]の娘、浅見ハナ(当時20歳)が、高い石段を登り降りして三度の食事を運び、晩酌の相手をし、善蔵の長男(小学生)の世話をみたりした。「鶯のやうに」他を経て、大正11年作「おせい」の可憐なモデルとして登場するが、善蔵との困窮生活は、「蠢く者」等に凄惨に描かれた。女兒二人を産んだ。「われと遊ぶ子」に、郷里と東京の妻子への思いを、善蔵は深々と語る。善蔵から「お前のおかげで小説が書けた」と感謝されたことを、ハナは長く心の支えにしたと、伊藤ゆう子(善蔵三女、ハナ長女)は語っている。平成4年、東京で死去。

☆嘉村磯多(かむら・いそた):善蔵の影響

善蔵の文学の特色は詩情にあふれる哀愁味と自他に対する苛烈味と飄逸味にあり、大正時代において芥川龍之介とは対照的な私小説、心境小説を書く(小山内時雄)。これは、葛西善蔵が師事した徳田秋声の模倣ではなく、苛烈な芸術至上主義の所産であり、よって後継もないといえよう。

健康すぐれぬ善蔵は「酔狂者の独白」を口述し「不同調」の記者嘉村磯多(山口県出身 1897-1933)が筆記した。善蔵が描くその様子は狂気の沙汰だが、磯多は耐え65日で原稿74枚を得た(筆記料80円)。善蔵は彼の「崖の下」を結構な作品だと絶筆の葉書に書き送った。昭和6年「途上」で文壇的地位を確立した

磯多に、善蔵の苛烈な作家態度の影響は大きいが、善蔵の系譜を継ぐものではない。

6、葛西善蔵の資料紹介

○仰山曾不遊山

書画(詩幅)

1923(大正 12)年9月

1,867mm×280mm(資料 1,230mm×220mm)

親友舟木重雄が奈良に移り住むことになり、送別の意をこめてこの句を画仙紙にしたためて重雄に贈ったもの。「碧巖録」第 34 則の題目で、「仰山かつてゆさんせず」と訓むべきところ、善蔵は「山を仰いでかつて山に遊ばず」と訓んで与えたという。

○音もなく秋雨けふる湯の宿に酌みかはしけり別れの酒を

書画(歌幅)

410mm×265mm

「血を吐く」よりとして「音もなく秋雨けふる湯の宿に酌みかはしけり別れの酒を」の歌がある。「木佐木雅兄」の詞書きがある。木佐木勝は「中央公論」の編集者であった。

○「暗い部屋にて」

原稿

大正9年

「解放」第2巻第 10 号(大正9年 10 月 1 日)に掲載。日本近代文学館所蔵。

○平野弥亮宛書簡(明治 44 年 1 月 21 日付)

書簡(複製)

1911(明治 44)年 1 月 21 日

177mm×1,270mm

平野弥亮は善蔵の妻つるの父である。平野家の援助がなかったならば、後の作家葛西善蔵はない。在京の善蔵、つる、それに長男亮三の無事を伝える内容である。善蔵の修行時代で、この翌年「哀しき父」が発表される。原資料は個人蔵。

7、葛西善蔵年譜

- 1887(明治 20)年…1月 16 日、青森県中津軽郡弘前松森町 141 番地に誕生。
父宇一郎(30 歳)と母ひさ(26 歳、南津軽郡碓ヶ関村、佐々木三治長女)の長男で二姉がおり、父は米の仲買をしていた。
- 1889(明治 22)年…2歳。家が没落し北海道寿都に移住。弟誕生。以後転籍を重ね、五所川原尋常小学校に入学。
- 1893(明治 26)年…6歳。碓ヶ関の母の生家に転籍、碓ヶ関尋常小学校に転校。
10 歳、同校補習科に入学。
- 1899(明治 32)年…12 歳。補習科卒業。五所川原村の親戚神家の質屋で働き、蔵の馬琴他を読み、小説家を志した。
- 1900(明治 33)年…13 歳。青森市米町の便利屋の小僧となる。
- 1902(明治 35)年…15 歳。青雲の志を抱き初上京、新聞売子のかたわら夜学に通う。母病気のため帰郷。7月、母死去。
- 1903(明治 36)年…16 歳。春を待たずに渡道。車掌、営林署、枕木伐採、金鉱等で働く。歌志内の伯母夫婦を訪ねる。
- 1905(明治 38)年…18 歳。再上京。8月哲学館大学(現・東洋大学)第二科普通講習科入学。止宿先の染谷そめを知る。
- 1906(明治 39)年…19 歳。無届欠席で除名。大学部二科二年聴講。美文集・紅葉・柳浪・露伴を読む。佐藤栄七、八田健一を知る。翌年東洋大学専科2年編入。
- 1907(明治 40)年…20 歳。鎌倉で「商人宿」を書く。独歩を読む。
- 1908(明治 41)年…21 歳。3月末、南津軽郡浪岡村の平野弥亮長女つる(明治 22—昭和 43)と結婚。4月単身上京、栄七の紹介で徳田秋

声に師事。相馬御風、光用穆を知る。6月碓ヶ関の葡萄園で妻と生活。9月単身上京。早稲田大学英文科3年聴講。そめと酔余、警察署に保護される。

- 1909(明治42)年…22歳。5月創作を志し、茨城県大洗に半年近く滞在。長男亮三誕生にも帰郷せず、一作も得ず、文芸の前に全てを犠牲にする決意を固め帰京。
- 1910(明治43)年…23歳。鎌倉で思索、創作にふける。11月岳父に伴われ妻子上京。東京に一家を構える。
- 1911(明治44)年…24歳。舟木重雄、広津和郎、相馬泰三を知る。経済が破綻し妻子を帰郷させる。郷里で長女きく江誕生。
- 1912(大正元)年…25歳。9月同人雑誌「奇蹟」創刊号に処女作「哀しき父」発表、好評。翌年5月廃刊迄4作発表。
- 1914(大正3)年…27歳。妻の実家で次女ゆき誕生。梗概物を書き、生活を支える。
- 1915(大正4)年…28歳。離婚の手紙を送るが帰郷、妻子と棲みロシア文学他を読む。上京、宇野浩二を知る。
- 1916(大正5)年…29歳。一家をあげて上京。米穀仲買店に勤務。
- 1917(大正6)年…30歳。「奇蹟」廃刊以降の作「贖物」を発表。妻は金策に帰郷、再び東京に帰らなかった。
- 1918(大正7)年…31歳。「早稲田文学」に「子をつれて」を発表、文名挙がる。生計困難のため、妻子を妻の実家に預ける。
- 1919(大正8)年…32歳。第一創作集『子をつれて』を新潮社から出版、新進作家としての地位確立。12月下旬、鎌倉の建長寺内の宝珠院に転宿した。
- 1920(大正9)年…33歳。創作集『馬糞石』出版(春陽堂)。東洋大学から「得業」の称号を受けた。
- 1921(大正10)年…34歳。咯血する。『贖物』出版(春陽堂)。
- 1922(大正11)年…35歳。発熱続く。父死去。『哀しき父』出版(改造社)。肺浸潤と診断される。
- 1923(大正12)年…36歳。『悪魔』出版(金星堂)。宝珠院で大震災にあい上京。後日、浅見ハナも上京し本郷区弓町の西城館に同居する。
- 1924(大正13)年…37歳。口述筆記始まる。『子をつれて』出版(新潮社)。亡父

三回忌にハナを同伴し帰郷。

1925(大正 14)年…38 歳。三女ゆう子(母ハナ)誕生。世田谷三宿に転居。生活すさむ。

1927(昭和2)年…40 歳。入院2度。11 月、弟勇蔵死去。12 月、三宿の自宅に帰る。胸部疾患進む。

1928(昭和3)年…41 歳。四女久美子(母ハナ)誕生。7月『葛西善蔵全集』第一巻刊行を見る。21 日、絶望と新聞報道される。22 日、肉親、知友と別盃を交わす。7月 23 日、永眠。